

SNS使用態度に関する尺度の構成 (3)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-07-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川上, 正浩 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/2000143 |

SNS 使用態度に関する尺度の構成 (3)

川上 正浩

臨床心理学専攻教授

要約

川上 (2023a, 2023b) は、高校生、大学生を対象に、SNS 使用態度について測定が可能となる包括的な尺度を作成することを目的とし、複数の SNS 使用に関連する尺度項目を参照、修正、統合したうえで、高校生、大学生、大学院生の男女、計 190 名を対象に質問紙調査を実施した。因子分析の結果、「ネガティブ表出」、「依存的使用」、「対比ネガティブ」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「暴露不安」、「ハードルの低さ」、「継続義務感」、「炎上容認」、「情報共有」の 10 因子が抽出され、さらに、これらに対応する下位尺度を構成する全 53 項目からなる SNS 使用態度尺度が提案された。しかしながら、「ハードルの低さ」、「情報共有」の 2 つの下位尺度に関しては、SNS の使用に際しての比較的一般的な態度であることから、これら 2 つを除外した尺度を改めて構成することをめざした。このため、川上 (2023a, 2023b) のデータにさらにデータを加え、高校生、大学生、大学院生の男女、計 313 名を対象に質問紙調査が実施された。その結果、改めて 41 項目から構成され「ネガティブ表出」、「依存的使用」、「対比ネガティブ」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「暴露不安」、「継続義務感」、「炎上容認」の 8 つの下位尺度からなる SNS 使用態度改訂版が作成された。

キーワード：SNS, 測定尺度, 高校生, 大学生

I 問題と目的

2010 年代に多数のソーシャルメディアが生まれて以降、インターネット上でのソーシャル・ネットワークワーキング・サービス (Social Networking Service)、いわゆる SNS の利用が一般的となり、オンライン上でのコミュニケーションへの依存度、そしてその重要度は一気に増加してきたと言える (正木, 2019)。従来の我々のコミュニケーションそのものが部分的に SNS 上に移行する一方で、新たな形態・内容のコミュニケーションも発生、普及しつつあり、SNS は人々に様々なメリットを与える一方、個人レベルあるいは社会レベルで、マイナスの影響も見えるようになってきた (青木・妹尾, 2024)。そもそも、SNS を含めた「インターネット」の使用に関しては、Griffiths (2005) が、耐性 (tolerance)、重要視 (salience)、気分の変化 (mood modification)、引きこもり (withdrawal)、

葛藤 (conflict)、再発 (relapse) といった「薬物依存」に近い次元 (dimension) が含まれていると指摘するように、依存の観点からの研究も多く見られる (たとえば、Kurşuncu et al., 2023; 宮城ら, 2020; 田ノ上・田邊, 2020)。

SNS に対しては、様々な使用の目的や使用の態度が存在し、これらを適切に測定することが、現代のコミュニケーションの形態として定着した感のある SNS と人間との関係を明らかにするためには必要であると考えられる。川上 (2023a, 2023b) は、SNS を X (旧 Twitter)、Instagram、LINE 等と定義したうえで、SNS の使用に対する態度について独立に測定することを意図した尺度を構成することをめざした。このため、藤・吉田 (2009) のインターネット上での行動内容、藤井ら (2013) の NTBS (Twitter の不適切な投稿) 尺度、濱口・金子 (2021) のサイバーアグレッション

ン尺度 (cyber aggression scale: CAS), 菱山 (2009) および橋本・山田 (2020) のインターネット依存傾向尺度, 黄ら (2017) のソーシャルメディアの利用動機尺度, 石川 (2019) の現実のコミュニケーション行動尺度, 柏原 (2011) の Twitter 利用動機尺度, 川浦ら (2005) の mixi における経験と行動, 北上ら (2015) のテクノ依存傾向, 黒川ら (2020) の高校生用スマートフォン利用によるインターネット依存傾向測定尺度, 前田 (2021) および森・名取 (2018) の能動的 SNS 疲れ尺度, 増井ら (2019) の日本語版ネット荒らし尺度, 松島ら (2017) の大学生版スマートフォン依存傾向尺度, 松浦ら (2020) の SNS 効用認知尺度, 宮戸・小玉 (2017) のインターネット依存傾向尺度, 森ら (2014) の受動的 SNS ストレスイベント尺度, 諸井・木ノ下 (2021) の SNS における居場所感覚尺度, 二宮 (2017) の Twitter 上の自己呈示尺度, 西村 (2017) のプライバシー懸念・LINE の効用認知尺度, 西村・遠藤 (2009) の尺度を改変した澤井・福岡 (2018) のインターネット利用動機などの尺度項目, 能仁ら (2022) の SNS 利用行動尺度, 小倉・藤本 (2019) の LINE 利用に関する不合理な信念尺度, 大野 (2019) の SNS 利用動機尺度, 岡本 (2017) の SNS ストレス尺度, 岡安 (2016) のインターネット利用行動 (尺度), 申・潮村 (2019) の SNS 依存および SNS の使用認知尺度, 高橋・伊藤 (2016) の SNS 利用時の行動尺度, 戸田ら (2015) の新しいスマートフォン依存尺度, 鶴田ら (2014) の高校生向けインターネット依存傾向測定尺度, 都筑ら (2019) の SNS の投稿についての態度, といった複数の SNS に関わる態度, 行動に関する尺度を組み合わせ, さらにそれらの項目を, 単独の項目として「SNS」に対する質問項目であることが理解可能であること, ダブルバーレル質問でないこと, などに配慮し, 表現あるいは表記の修正統一を行った。そのうえで, 類似した項目や, 不適当と判断される項目を吟味, 削除し, 最終的に 72 項目を作成した。

川上 (2023a, 2023b) では, 因子分析の結果,

「ネガティブ表出」(11 項目), 「依存的使用」(6 項目), 「対比ネガティブ」(5 項目), 「賞賛希求」(5 項目), 「拒否不安」(6 項目), 「暴露不安」(7 項目), 「ハードルの低さ」(2 項目), 「継続義務感」(3 項目), 「炎上容認」(5 項目), 「情報共有」(3 項目) の 10 因子 53 項目からなる SNS 使用態度尺度が構成された。「ネガティブ表出」は, 「愚痴を言うために SNS を利用する」, 「SNS 上では, 他人の悪口を言いやすい」など, SNS 上でネガティブな感情や経験を表出する態度である。「依存的使用」は, 「時間を忘れて SNS の投稿を見続ける」, 「SNS 接続を終了してから数分後に, 必要もないのに再び接続する」など, SNS を頻繁に見る, 長時間閲覧するなど, SNS に対して依存的な態度である。「対比ネガティブ」は, 「SNS で他人の日常に関する投稿を見て嫉妬する」, 「SNS を見ていると, 他人が自分よりも幸せそうだと感じる」など, SNS 上の他者の投稿を閲覧することで, 自分や自分の生活に関して他者との比較を行い, それによって, 自身に対してネガティブな感情をもつ態度である。「賞賛希求」は, 「いいねなどの評価やコメントをもらうために SNS を利用する」, 「現実の生活が充実していることを自慢するために, SNS を利用する」など, SNS 上での投稿により, 自分自身が評価されること, 賞賛されることを求める態度である。「拒否不安」は, 「SNS では, 自分の投稿に既読がつかかを何度も確認する」, 「SNS での自分の投稿が未読のままだと, 相手に嫌われていると思う」など, SNS 上での自身の投稿に対して, ネガティブなフィードバックや批判が与えられることを心配する態度である。「暴露不安」は, 「SNS によって, 自分の行動が他人に常に見張られている気がする」, 「SNS への投稿は, 誰にチェックされているのかわからないので不安になる」など, SNS 上で自分の情報が暴露されていることに関してネガティブな感情をもったり不安を感じたりする態度である。「ハードルの低さ」は, 「大したことのない用事でも, SNS だと気軽にやり取りができる」, 「SNS では, 面と向かって話しにくい相手ともや

り取りしやすい」の2項目からなり、SNS 上でのやり取りを、対面と比較して敷居の低いものであると感じる態度である。「継続義務感」は、「SNS では、相手から返信が来なくなるまでやり取りを続けたいといけない」、「SNS でみんながやり取りしているなか、自分だけ抜けるのはよくない」など、SNS 上でのやり取りを継続していくことを、義務と感じる態度である。「炎上容認」は、「SNS で誹謗や中傷の投稿が目に入ると気が滅入る（逆転）」、「おもしろいので、物議をかもしようなネタを SNS 上で共有したり、送ったりする」など、SNS 上での誹謗中傷などの投稿を、ネガティブなものとして容認する態度である。「情報共有」は、「家族・友人・知人とコミュニケーションをとるために SNS を利用する」、「事務的な連絡のために SNS を利用する」など、娯楽として、というよりも、日常的な連絡手段として SNS を使用する態度である。

川上 (2023a, 2023b) では以上の尺度構成について論じられたが、川上 (2023a, 2023b) で分析されたデータは、190 名のデータであり、因子分析の結果抽出された項目数が 53 項目であることを考えると必ずしも十分な数とは言えない。さらに、ここで構成された 10 個の下位尺度のうち、「ハードルの低さ」および「情報共有」は、個人の特徴を表す尺度というよりは、一般的な SNS そのものの特徴を表現した尺度であるとも考えられる。実際、川上 (2023a, 2023b) のデータにおいては、ハードルの低さ尺度の平均得点は 3.38、情報共有尺度の平均得点は 3.81 と、かなり高くなっている¹⁾。そこで、本研究では、川上 (2023a, 2023b) の SNS 使用態度尺度を、より多くの調査対象者データを用いて改訂し、これに当たっては、「ハードルの低さ」および「情報共有」の2つの下位尺度を除外した、8 下位尺度からなる尺度として構成することを目指す。

II 方法

1. 調査時期

調査は 2022 年 8 月から 2023 年 11 月にかけて

実施された。

2. 調査対象者

本調査は、川上 (2023a, 2023b) において報告された 190 名のデータ (近畿圏・中部圏の大学、女子大学に所属する大学生 136 名 (男性 28 名、女性 108 名)、近畿圏の大学院に所属する大学院生 8 名 (男性 4 名、女性 4 名)、近畿圏の女子高校に所属する高校生 49 名) に新たなデータを加え、近畿圏・中部圏の大学、女子大学に所属する大学生 192 名 (男性 58 名、女性 132 名、不明 2 名: 平均年齢 19.9 歳, $SD=3.09$)、近畿圏の大学院に所属する大学院生 10 名 (男性 6 名、女性 4 名: 平均年齢 23.6 歳, $SD=2.46$)、近畿圏の高校に所属する高校生 111 名 (女性 106 名、不明 5 名: 平均年齢 17.2 歳, $SD=0.62$) の、計 313 名が調査に参加した。全調査対象者の平均年齢は 19.1 歳 ($SD=2.93$) であった。なお、ここに含まれる大学生の一部のデータは川上・井上 (2024) においても、分析に用いられたデータである。

3. 質問紙の構成

川上 (2023a, 2023b) において報告された SNS 使用態度尺度 53 項目が使用された。なお、実施に際しては、それ以外の SNS 使用態度に関する項目 (川上, 2023a, 2023b) も含まれていたが、本研究ではこれらは分析の対象とせず、さらに川上 (2023a, 2023b) において「ハードルの低さ」に因子負荷量の高かった 2 項目 (「大したことのない用事でも、SNS だと気軽にやり取りができる」、「SNS では、面と向かって話しにくい相手ともやり取りしやすい」)、「情報共有」に因子負荷量の高かった 3 項目 (「家族・友人・知人とコミュニケーションをとるために SNS を利用する」、「家族・友人・知人との関係を維持するために SNS を利用する」、「事務的な連絡のために SNS を利用する」) についても、以降の分析の対象からは除外された。

4. 手続き

大学教員が担当する、高校生向けの心理学系講義の講義時間中あるいは大学や大学院における心理学系講義の講義時間中に質問紙が配付され、調

調査対象者は集団で質問紙調査に参加した。質問紙には、「これは、あなたの SNS (X (旧 Twitter), Instagram, LINE 等) の利用状況や考え方について尋ねるものです。次の質問に対して、「全くあてはまらない (1)」から、「よくあてはまる (5)」のうち、最も自分にあてはまるものを 1 つだけ選んで○をつけてください。」との指示がなされ、5 件法の選択肢のいずれかに○をつけることが調査対象者に求められた。調査対象者には個人のペースでこれらへの回答を進めることが求められた。

5. 倫理的配慮

調査の実施に際しては、その結果が統計的に処理され、個人の結果が問題とされないこと、結果は研究の目的以外に使用されないこと、参加は自由意志によるものであり、いつでも質問への回答を辞められることをフェイスシートに記載し、周知した。これらの記載事項に同意する場合にのみ、調査に参加することが求められた。

III 結果

1. SNS 使用態度尺度 (改訂版) の因子分析

川上 (2023a, 2023b) において報告された、10 因子 53 項目のうち、ハードルの低さ (2 項目)、情報共有 (3 項目) を除外した 48 項目を対象に、あらためて最尤法、Promax 回転による因子分析を行った。因子数を 8 因子に固定し、どの因子にも因子負荷量が $|.35|$ 未満であることや、複数の因子に対して因子負荷量が $|.35|$ 以上であることを考慮して、項目の削除を行った上で因子分析を繰り返す、最終的に 41 項目からなる 8 因子解を採択した。この因子分析表を表 1 に示す。

第一因子は、「SNS で他人の日常に関する投稿を見て嫉妬する」や「SNS で他人の投稿を見ると劣等感を感じる」など、川上 (2023a, 2023b) における「対比ネガティブ」を構成する 5 項目のうち 4 項目に負荷量が高く、SNS 上の他者との比較によりネガティブになる態度として「対比ネガティブ」と命名された。

第二因子は、「腹が立った出来事があると、そのことへの怒りや不満を SNS に投稿する」や

「SNS では、体調が悪いことをアピールする」など、川上 (2023a, 2023b) における「ネガティブ表出」を構成する 11 項目のうち 9 項目に負荷量が高く、ネガティブな内容・感情を SNS で表出する態度として「ネガティブ表出」と命名された。

第三因子は、「他人から注目されるために SNS を利用する」や「現実の生活が充実していることを自慢するために、SNS を利用する」など、川上 (2023a, 2023b) における「賞賛希求」を構成する 5 項目のうち 4 項目と、「自分を目立たせようと、誇張した内容を SNS に投稿する」の項目に負荷量が高く、SNS 上での賞賛されることを求める態度として「賞賛希求」と命名された。

第四因子は、「SNS では、自分の投稿に既読がついたかを何度も確認する」や「SNS での自分の投稿が未読のままだと、相手に嫌われていると思う」など、川上 (2023a, 2023b) における「拒否不安」を構成する 6 項目のうち 4 項目に負荷量が高く、SNS 上での批判等を心配する態度として「拒否不安」と命名された。

第五因子は、「他にしなければならないことがあっても、つい SNS を見てしまう」や「時間を忘れて SNS の投稿を見続ける」など、川上 (2023a, 2023b) における「依存的使用」と同一の項目に負荷量が高く、「依存的使用」と命名された。

第六因子は、「SNS で常に人とつながっている気がして疲れる」や「SNS に書き込むと、自分の行動を人に把握される気がして気持ちが悪い」など、川上 (2023a, 2023b) における「暴露不安」と同一の項目に負荷量が高く、「暴露不安」と命名された。

第七因子は、「自分から SNS でのやり取りを終えるのは相手に失礼だ」、「SNS では、相手から返信が来なくなるまでやり取りを続けたいといけない」の川上 (2023a, 2023b) における「継続義務感」を構成する 3 項目のうち 2 項目に負荷量が高く、「継続義務感」と命名された。

第八因子は、「SNS で誹謗や中傷の投稿が目

表1 SNS使用態度尺度の因子分析結果 (最尤法, Promax 回転)

| | I | II | III | IV | V | VI | VII | VIII |
|---|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 第1因子: 対比ネガティブ ($\alpha=.879$) ($M=2.54, SD=1.19$) | | | | | | | | |
| SNSで他人の日常に関する投稿を見て嫉妬する | .902 | -.034 | .033 | -.002 | -.066 | -.067 | -.005 | -.040 |
| SNSで他人の投稿を見ると劣等感を感じる | .864 | -.026 | -.048 | -.035 | .025 | .019 | .019 | .048 |
| SNSで他人の日常に関する投稿から、自分の日常と他人の日常とを比較する | .795 | -.079 | .021 | .075 | .053 | .083 | -.101 | .014 |
| SNSを見ていると、他人が自分より幸せそうだと感じる | .647 | .023 | .002 | .026 | .044 | -.014 | .005 | .031 |
| 第2因子: ネガティブ表出 ($\alpha=.875$) ($M=1.76, SD=0.81$) | | | | | | | | |
| 腹が立った出来事があると、そのことへの怒りや不満をSNSに投稿する | -.021 | .848 | -.079 | .033 | .084 | -.096 | -.084 | .150 |
| SNSでの投稿やコメントに「むかつく」、「うざい」のような、きつい言葉を用いる | -.148 | .799 | -.110 | .200 | .048 | .136 | -.105 | -.116 |
| 愚痴を言うためにSNSを利用する | -.023 | .763 | -.039 | .005 | .006 | .028 | -.043 | .064 |
| 嫌なことがあると、周りの人がどう思うかは気にせずSNSに投稿する | -.116 | .745 | .073 | -.014 | -.001 | .002 | .027 | .051 |
| SNS上では、他人の悪口を言いやすい | .075 | .730 | .011 | -.037 | .053 | -.030 | -.106 | -.092 |
| SNSでは、体調が悪いことをアピールする | -.049 | .665 | .158 | -.032 | -.100 | -.063 | .134 | .094 |
| 否定的な内容を投稿することが多いSNSアカウント (いわゆる裏アカウント) を利用している | .081 | .567 | -.009 | .075 | .117 | .041 | -.134 | -.159 |
| SNSでは、忙しいことをアピールする | .133 | .502 | .201 | -.143 | -.067 | .015 | .222 | .096 |
| SNSでは、感情にまかせて衝動的に投稿やコメントをしないよう注意している | -.092 | -.471 | .201 | .063 | .191 | .053 | -.011 | .192 |
| 第3因子: 賞賛希求 ($\alpha=.810$) ($M=1.86, SD=0.82$) | | | | | | | | |
| 他人から注目されるためにSNSを利用する | -.060 | -.026 | .830 | .103 | -.057 | -.046 | -.011 | .012 |
| 良い意味で自分が目立つためにSNSを利用する | -.022 | -.014 | .720 | .025 | .068 | .016 | -.074 | -.033 |
| いいねなどの評価やコメントをもらうためにSNSを利用する | .009 | .045 | .610 | .138 | -.067 | -.109 | .109 | .081 |
| 現実の生活が充実していることを自慢するために、SNSを利用する | .149 | .104 | .506 | -.087 | .089 | .155 | -.121 | -.140 |
| 自分を目立たせようと、誇張した内容をSNSに投稿する | .078 | .344 | .411 | -.123 | -.006 | .038 | .111 | -.080 |
| 第4因子: 拒否不安 ($\alpha=.813$) ($M=2.39, SD=1.11$) | | | | | | | | |
| SNSでは、自分の投稿に既読がついたかを何度も確認する | .038 | .016 | .009 | .746 | .041 | -.018 | -.040 | .053 |
| 反応がよかったSNSの投稿について、何度も読み返す | .020 | .054 | .201 | .687 | -.045 | -.049 | -.055 | -.020 |
| 自分の投稿やコメントへの反応が気になり、何度もSNSを開く | .064 | -.059 | .300 | .494 | .068 | -.028 | -.011 | .082 |
| SNSでの自分の投稿が未読のままだと、相手に嫌われていると思う | .265 | .043 | -.031 | .382 | -.078 | .032 | .215 | -.062 |
| 第5因子: 依存の使用 ($\alpha=.882$) ($M=3.38, SD=1.12$) | | | | | | | | |
| 他にしなければならぬことがあっても、ついSNSを見てしまう | .022 | -.092 | -.035 | -.025 | .848 | -.015 | .103 | .024 |
| 時間を忘れSNSの投稿を見続ける | .013 | .083 | -.033 | -.111 | .833 | -.036 | .095 | .052 |
| 一人の時間ができたら、すぐにSNSにアクセスする | -.067 | -.042 | .035 | -.001 | .786 | -.025 | -.030 | -.018 |
| SNS接続を終了してから数分後に、必要もないのに再び接続する | -.067 | .004 | -.003 | .134 | .786 | .056 | .018 | -.032 |
| 朝起きるとすぐにSNSにアクセスする | .090 | .044 | .121 | -.021 | .642 | .022 | -.108 | -.026 |
| SNSを利用できない状態が続いても不安にならない | -.054 | -.161 | .118 | -.038 | -.541 | .108 | -.130 | .000 |
| 第6因子: 暴露不安 ($\alpha=.813$) ($M=2.35, SD=0.90$) | | | | | | | | |
| SNSで常に人とつながっている気がして疲れる | -.018 | -.068 | .043 | -.021 | -.052 | .766 | .055 | -.015 |
| SNSに書き込むと、自分の行動を人に把握される気がして気持ちが悪い | -.019 | -.066 | -.085 | .030 | -.050 | .696 | -.043 | .045 |
| SNSを使っていると、他人に常に縛られている気がする | .137 | .079 | -.065 | -.018 | -.046 | .663 | -.040 | -.014 |
| SNSによって、自分の行動が他人に常に見張られている気がする | -.119 | -.039 | .107 | .126 | .061 | .645 | .036 | -.114 |
| SNSへの投稿は、誰にチェックされているのかわからないので不安になる | .007 | .014 | -.153 | -.058 | -.032 | .620 | .028 | .006 |
| 現実の家族・友人・知人とSNS上でつながっていることに窮屈さを感じる | -.079 | .098 | .150 | -.096 | -.021 | .593 | .079 | .050 |
| SNSへの投稿が、見てほしい人以外にも見られてしまうのが嫌だ | .073 | .034 | -.030 | -.095 | .113 | .386 | -.060 | .241 |
| 第7因子: 継続義務感 ($\alpha=.717$) ($M=1.99, SD=0.94$) | | | | | | | | |
| 自分からSNSでのやり取りを終えるのは相手に失礼だ | -.050 | -.075 | -.004 | -.036 | .034 | .012 | .809 | -.035 |
| SNSでは、相手から返信が来なくなるまでやり取りを続けたいといけない | .015 | -.075 | -.013 | -.028 | .142 | .029 | .716 | -.132 |
| SNSでの投稿に、すぐ返信しなければ相手に嫌われるのではないかと不安になる | .203 | .072 | -.124 | .300 | -.042 | .123 | .366 | -.002 |
| 第8因子: 炎上容認 ($\alpha=.598$) ($M=2.36, SD=0.97$) | | | | | | | | |
| SNSで誹謗や中傷の投稿が目に入ると気が滅入る | -.058 | .074 | -.048 | .039 | -.006 | .004 | .036 | .746 |
| SNSで他人のネガティブな投稿を見ると気が滅入る | .072 | -.023 | .001 | .062 | .014 | .201 | -.077 | .589 |
| SNS上でのいざこざやトラブルを起こしたくない | .061 | -.062 | .018 | -.015 | -.016 | -.061 | -.212 | .406 |
| 因子間相関 | | | | | | | | |
| I | — | | | | | | | |
| II | .367 | — | | | | | | |
| III | .471 | .535 | — | | | | | |
| IV | .617 | .333 | .545 | — | | | | |
| V | .370 | .407 | .477 | .411 | — | | | |
| VI | .558 | .127 | .088 | .319 | .151 | — | | |
| VII | .458 | .155 | .255 | .413 | .098 | .367 | — | |
| VIII | .275 | -.092 | .130 | .289 | .180 | .305 | .251 | — |

入ると気が滅入る」や「SNSで他人のネガティブな投稿を見ると気が滅入る」など、川上(2023a, 2023b)における「炎上容認」を構成する5項目のうち3項目に負荷量が高かった。これらの項目に対する因子負荷量はいずれも正の値であり、SNS上でのトラブルを否認する態度を表すと考えられるが、川上(2023a, 2023b)に倣い因子の命名としては「炎上容認」とされた。このため、後述の尺度得点の算出にあたっては、すべてを逆転項目として扱ったうえで、尺度得点の算出を行わない、炎上を容認する態度であるほど、得点が高くなるようにした。

以上の因子分析結果を、川上(2023a, 2023b)と比較する。「依存的使用」、「暴露不安」の2因子については、項目の出入りはなかった。「炎上容認」については、「おもしろいので、物議をかもしようなネタをSNS上で共有したり、送ったりする」、「SNSでの私の投稿やコメントが攻撃的だと思う人もいるが、私はおもしろいと思う」の2項目が削除された。「対比ネガティブ」については、「反応が悪かったSNSの投稿については、投稿したことをずっと後悔する」の項目が削除された。「ネガティブ表出」については、「現実から逃避するためにSNSを利用する」、「自分を目立たせようと、誇張した内容をSNSに投稿する」の2項目が削除され、後者は、「賞賛希求」因子に負荷量が高く、こちらに組み入れられた。さらに「賞賛希求」からは、「日常の出来事を、ついSNSで発信したくなる」が削除されている。「拒否不安」については、「SNSでの投稿に、すぐ返信しなければ相手に嫌われるのではないかと不安になる」、「SNSでは、相手の投稿やコメントが本当の気持ちなのかわからず不安になる」の2項目が削除された。そして、この「SNSでの投稿に、すぐ返信しなければ相手に嫌われるのではないかと不安になる」については、「継続義務感」に組み入れられ、「継続義務感」からは、「SNSでみんながやり取りしているなか、自分だけ抜けるのはよくない」が削除された。以上が、川上(2023a, 2023b)における結果と異なる部

分である。

第一因子(対比ネガティブ)に対して因子負荷量が.35以上の4項目の平均得点を調査対象者ごとに算出し、これを対比ネガティブ得点とした。同様の手続きで、ネガティブ表出得点、賞賛希求得点、拒否不安得点、依存的使用得点、暴露不安得点、継続義務感得点、炎上容認得点を調査対象者ごとに算出した。これに際して、因子負荷量が、負の値となっている項目、および炎上容認得点を算出するための項目については、逆転項目として扱ったうえで、尺度得点の算出を行なった。それぞれの下位尺度得点の平均値および標準偏差は、表1に示した。

また、これらの下位尺度の信頼性について検討するため、 α 係数を算出した(表1)。その結果、炎上容認については、 $\alpha = .598$ と、やや低い値であるものの、それ以外の尺度については、いずれも.700以上の α 係数を示した。

2. 下位尺度得点の性差あるいは校種による差異

それぞれの下位尺度得点に関して、性差が認められるか否かを t 検定により吟味した。この結果を表2に示した。その結果、依存的使用得点および炎上容認得点に有意な性差が認められ(それぞれ $t(292) = 4.044, p < .01$, $t(302) = 2.326, p < .05$)、依存的使用については男性よりも女性で、炎上容認については女性よりも男性で得点が高かった。その他の下位尺度得点には、有意な性差は認められなかった。

しかし、川上(2023b)同様、今回のデータについては、高校生、大学生、大学院生と、幅広い年齢層に渡るものであり、さらに、高校生については、女性のみデータしか取得できていないため、性差については、校種による差と交絡している可能性もある。そこで、男性、女性の両方で一定の人数が確保されている大学生のデータのみを用いて、改めて性差の検討を行った。この結果も表2に示した。その結果、依存的使用得点についても($t(182) = 2.523, p < .05$)炎上容認得点についても($t(182) = 2.451, p < .05$)、全データを対象とした分析と同様の性差が認められた。

表 2 SNS 使用態度尺度の下位尺度得点における性差

| | 全データ (N = 311) | | | 大学生のみ (N = 190) | | |
|---------|----------------|----------------|----------|-----------------|----------------|---------|
| | 男性 | 女性 | t値 | 男性 | 女性 | t値 |
| 対比ネガティブ | 2.58 (1.24) | 2.55 (1.19) | 0.206 | 2.63 (1.25) | 2.55 (1.17) | 0.445 |
| ネガティブ表出 | 1.77 (0.77) | 1.75 (0.82) | 0.149 | 1.76 (0.77) | 1.81 (0.87) | 0.335 |
| 賞賛希求 | 1.82 (0.83) | 1.85 (0.81) | 0.265 | 1.84 (0.86) | 1.83 (0.87) | 0.066 |
| 拒否不安 | 2.54 (1.16) | 2.33 (1.08) | 1.367 | 2.54 (1.22) | 2.22 (1.04) | 1.813 † |
| 依存的使用 | 2.89 (1.14) | 3.51 (1.07) | 4.044 ** | 2.90 (1.14) | 3.36 (1.15) | 2.523 * |
| 暴露不安 | 2.20 (0.82) | 2.40 (0.91) | 1.615 | 2.23 (0.84) | 2.45 (0.96) | 1.509 |
| 継続義務感 | 1.99 (0.86) | 1.99 (0.95) | 0.024 | 1.97 (0.89) | 1.89 (0.86) | 0.590 |
| 炎上容認 | 2.60 (1.02) | 2.29 (0.94) | 2.326 * | 2.59 (0.98) | 2.23 (0.89) | 2.451 * |

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表 3 SNS 使用態度尺度得点における校種差

| | 全データ (N = 313) | | | 女性のみ (N = 238) | | |
|---------|----------------|----------------|----------|----------------|----------------|---------|
| | 大学 | 高校 | t値 | 大学 | 高校 | t値 |
| 対比ネガティブ | 2.57 (1.19) | 2.48 (1.22) | 0.620 | 2.55 (1.17) | 2.50 (1.22) | 0.307 |
| ネガティブ表出 | 1.79 (0.84) | 1.69 (0.78) | 1.038 | 1.81 (0.87) | 1.69 (0.78) | 1.027 |
| 賞賛希求 | 1.82 (0.86) | 1.87 (0.74) | 0.488 | 1.83 (0.87) | 1.87 (0.74) | 0.423 |
| 拒否不安 | 2.32 (1.11) | 2.45 (1.15) | 0.946 | 2.22 (1.04) | 2.45 (1.14) | 1.575 |
| 依存的使用 | 3.21 (1.17) | 3.72 (0.95) | 3.747 ** | 3.36 (1.15) | 3.71 (0.94) | 2.435 * |
| 暴露不安 | 2.37 (0.93) | 2.33 (0.87) | 0.414 | 2.45 (0.96) | 2.34 (0.87) | 0.901 |
| 継続義務感 | 1.91 (0.87) | 2.12 (1.04) | 1.800 † | 1.89 (0.86) | 2.13 (1.04) | 1.947 † |
| 炎上容認 | 2.34 (0.92) | 2.41 (0.99) | 0.633 | 2.23 (0.89) | 2.40 (0.98) | 1.378 |

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

次に、校種に関して、高校生と大学生²⁾とで下位尺度得点に差異が認められるか否かを t 検定により吟味した。この結果を表3に示した。分析の結果、依存的使用得点においてのみ、高校生が大学生よりも高いことが示された ($t(287)=3.747, p<.01$)。

それ以外の下位尺度得点においては、高校生と大学生とで差異は認められなかった。この結果は、川上 (2023b) とは整合的ではなかった。すなわち、川上 (2023b) においては、継続義務感得点と炎上容認得点において、校種差が認められていたが、本研究ではそうした校種差は認められず、川上 (2023b) においては認められなかった依存的使用得点に校種差が認められた。継続義務感、炎上容認得点における不整合に関しては、尺度得点を構成する項目の出入りがあったため、特定の項目の影響が排除されたことによるものであるとも解釈可能である。一方で、依存的使用得点については、下位尺度得点算出に用いられている項目は、本研究と川上 (2023b) とで同一であるため、項目の影響には帰属できない。しかしながら、川上 (2023b) においても、依存的使用得点の校種差に関しては、大学で $M=3.33$ 、高校で $M=3.59$ と、本研究で認められた校種差と同様の方向を向いており、データ数が増えたことで、こうした校種差が明確に現れた結果であると解釈できる。

また、今回のデータにおいても、高校生については、女性のみデータしか取得できていないた

め、高校生と大学生との比較に性差が交絡している可能性がある。そこで、女性のみデータを利用して、高校生と大学生との下位尺度得点の差異について改めて検討を行った。その結果も表3に示した。その結果、全データを対象とした分析と同様に、依存的使用得点 ($t(225)=2.435, p<.05$) においてのみ、高校生が大学生よりも高いことが示され、それ以外の下位尺度得点においては、高校生と大学生とで差異は認められなかった。以上をまとめると、依存的使用得点については、男性より女性の方が、大学生よりも高校生で高く、炎上容認得点については女性よりも男性で高いことが示唆された。

3. 下位尺度得点間相関の分析

8個の下位尺度得点間の相関係数を算出した結果を表4に示した。また、男女別に相関係数を算出した結果を表5に示した。

全体を対象とした分析では、対比ネガティブ、依存的使用については、他のすべての下位尺度と有意な相関が認められた。また、対比ネガティブと拒否不安、賞賛希求と拒否不安およびネガティブ表出については、.50を超える相関係数が得られ、関連の強さが示された。炎上容認については、暴露不安を除いて、他の下位尺度とそれほど強い相関関係は認められないが、炎上容認と暴露不安の間に負の相関関係が認められることは注目される。性差に注目すると、炎上容認と対比ネガティブとの負の相関が、男性でより大きな値となって

表4 SNS使用態度尺度の下位尺度間相関

| | 対比ネガティブ | ネガティブ表出 | 賞賛希求 | 拒否不安 | 依存的使用 | 暴露不安 | 継続義務感 | 炎上容認 |
|---------|----------|---------|---------|----------|----------|----------|----------|------|
| 対比ネガティブ | — | | | | | | | |
| ネガティブ表出 | .287 ** | — | | | | | | |
| 賞賛希求 | .428 ** | .521 ** | — | | | | | |
| 拒否不安 | .616 ** | .348 ** | .568 ** | — | | | | |
| 依存的使用 | .364 ** | .389 ** | .460 ** | .430 ** | — | | | |
| 暴露不安 | .459 ** | .074 | .081 | .264 ** | .117 * | — | | |
| 継続義務感 | .450 ** | .123 * | .216 ** | .456 ** | .187 ** | .366 ** | — | |
| 炎上容認 | -.279 ** | .075 | -.097 † | -.270 ** | -.169 ** | -.314 ** | -.167 ** | — |

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表 5 SNS 使用態度尺度の男女別の相関係数 (右上: 男性, 左下: 女性)

| | 対比ネガティブ | ネガティブ表出 | 賞賛希求 | 拒否不安 | 依存的使用 | 暴露不安 | 継続義務感 | 炎上容認 |
|---------|----------|---------|---------|----------|---------|----------|---------|----------|
| 対比ネガティブ | — | .293 * | .495 ** | .678 ** | .416 ** | .552 ** | .415 ** | -.485 ** |
| ネガティブ表出 | .271 ** | — | .365 ** | .318 * | .381 ** | .190 | .045 | -.076 |
| 賞賛希求 | .418 ** | .566 ** | — | .582 ** | .406 ** | .183 | .263 * | -.257 * |
| 拒否不安 | .596 ** | .352 ** | .580 ** | — | .478 ** | .470 ** | .459 ** | -.399 ** |
| 依存的使用 | .364 ** | .409 ** | .480 ** | .455 ** | — | .187 | .171 | -.245 † |
| 暴露不安 | .447 ** | .047 | .040 | .229 ** | .066 | — | .318 * | -.265 * |
| 継続義務感 | .465 ** | .138 * | .191 ** | .459 ** | .192 ** | .367 ** | — | -.375 ** |
| 炎上容認 | -.229 ** | .116 † | -.033 | -.260 ** | -.099 | -.305 ** | -.101 | — |

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

いることが注目に値する。

IV 考察

本研究では、川上 (2023a, 2023b) において、高校生、大学生、大学院生を調査対象者として実施された調査の結果構成された SNS 使用態度尺度の改定を目的に分析が行われた。8 因子の下位尺度得点の性差に関しては、依存的使用得点が、男性より女性で、また大学生より高校生で高く、炎上容認得点については、女性より男性で高い可能性が示唆された。依存的使用に関しては、高校生 (高専生) 824 人を対象にインターネット利用状況を調査した西村・遠藤 (2009) の結果とも整合的であった。炎上容認得点についての性差に関しては、「迷惑動画」としてメディアで話題になる動画に、男性のものが多くことと整合的であると考えられる。しかしながら、本研究では男性のデータは女性のデータに比較して少なく、今後、さらにデータを収集して性差について検討していく必要があると思われる。

さらには、拒否不安が賞賛希求、暴露不安、そして依存的使用とも関連していることも示された。拒否不安と賞賛希求の関連は、川上 (2023b) でも指摘したように、小島ら (2003) の賞賛獲得欲求と拒否回避欲求との関連に準えることができる。一方で、自分の日常がインターネット上に暴露されていることに対する不安も同時に高まっており、拒否されないために、といった意識が依存的な使

用に繋がる可能性も示唆される。

本研究で改訂された SNS 使用態度尺度は、「対比ネガティブ」、「ネガティブ表出」、「賞賛希求」、「拒否不安」、「依存的使用」、「暴露不安」、「継続義務感」、「炎上容認」の 8 下位尺度からなる尺度である。今後、さらに多くのデータ、特に男性のデータを収集すると同時にさらに項目を吟味し、信頼性を高めつつ、性差等についての見識を深めていくことを目指したい。

注

- 1) 川上 (2023a, 2023b) においては、依存的使用尺度の平均得点も 3.39 と、ハードルの低さ得点と同程度に高い値となっている。しかしながら、川上 (2023b) においては、依存的使用尺度得点に男女差が認められていること (ハードルの低さ尺度、情報共有尺度得点においては認められていない)、川上・井上 (2024) において、Young (1998 ; 川上・井上, 2023) の IAT (Internet Addiction Test) 尺度得点と最も高い相関 ($r = .605$) を示していることなどから、依存的使用尺度については、今回の検討 (排除) の対象とはしない。
- 2) 大学院生については、全体数が少ないため、ここでは検討の対象としなかった。

文献

青木しほ・妹尾 大 (2024). 過負荷に注目した

- SNS 疲れの軽減方法. 経営情報学会全国研究発表大会要旨集, **202311**, 120-123.
- 藤桂・吉田富二雄 (2009). インターネット上での行動内容が社会性・攻撃性に及ぼす影響: ウェブログ・オンラインゲームの検討より. 社会心理学研究, **25**, 121-132.
- 藤井 勉・山本政人・伊藤忠弘 (2013). Twitter における不適応的な「つぶやき」の要因: パーソナリティ特性からの検討. 学習院大学計算機センター年報, **34**, 40-55.
- Griffiths, M. (2005). A 'components' model of addiction within a biopsychosocial framework. *Journal of Substance use*, **10**, 191-197.
- 濱口佳和・金子 楓 (2021). サイバー・アグレッション尺度の作成及びその心理的ストレス反応との関連の検討. 筑波大学心理学研究, **59**, 25-35.
- 橋本かりん・山田智之 (2020). SNS の利用態度が大学生のインターネット依存及び自信に与える影響. 上越教育大学研究紀要, **39**, 417-425.
- 菱山和亮 (2009). P1-20 項目反応理論を用いたインターネット依存傾向尺度の検討. 日本パーソナリティ心理学第18会大会発表論文集, 64-65.
- 黄 正国・内野悌司・磯部典子・二本松美里・岡本百合・三宅典恵・永澤一恵・矢式寿子・池田龍也・吉原正治 (2017). 大学生のソーシャルメディアの利用時間と心理的要因との関連. 総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集, **33**, 17-24.
- 石川 真 (2019). ネット上のコミュニケーション行動における現実と理想の差異. 上越教育大学研究紀要, **38**, 217-226.
- 柏原 勤 (2011). Twitter の利用動機と利用頻度の関連性: 「利用と満足」研究アプローチからの検討. 慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要: 社会学心理学教育学: 人間と社会の探究, **72**, 89-107.
- 川上正浩 (2023a). SNS 使用態度に関する尺度の構成 (1) 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, **17**, 37-46.
- 川上正浩 (2023b). SNS 使用態度に関する尺度の構成 (2) 大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科臨床心理学専攻・附属カウンセリングセンター研究紀要, **17**, 47-55.
- 川上正浩・井上真理子 (2023). インターネット依存尺度 (IAT) の検討—大学生を対象として—大阪樟蔭女子大学研究紀要, **13**, 37-46.
- 川上正浩・井上真理子 (2024). SNS 使用態度尺度とインターネット依存尺度 (IAT) との関連性の検討 大阪樟蔭女子大学研究紀要, **14**, 30-37.
- 川浦康至・坂田正樹・松田光恵 (2005). ソーシャルネットワークワーキング・サービスの利用に関する調査: mixi ユーザの意識と行動. コミュニケーション科学, **23**, 91-110.
- 北上大樹・坂部創一・山崎秀夫 (2015). 情報環境におけるインターネット利用と心理的レジリエンスとの関係性. 第29回環境情報科学学術研究論文発表会論文集, 309-314.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介 (2003). 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み. 性格心理学研究, **11**, 86-98.
- 黒川雅幸・本庄 勝・三島浩路 (2020). 高校生・高専生用スマートフォン利用によるインターネット依存傾向尺度の作成. 実験社会心理学研究, **60**, 37-49.
- Kurşuncu, M. A., Griffiths, M. D., Baştumur, Ş., & Şal, F. (2023). Triangling in Family of Origin, Internet Addiction, and Social Media Addiction: What Is the Role of Experiential Avoidance in the Relationship?. *International Journal of Mental Health and Addiction*, 1-20.
- 前田彩花 (2021). SNS 疲れによって引き起こされるネガティブ感情について. 甲南女子大学大学院論集, **19**, 37-48.
- 正木大貴 (2019). SNS は人間関係を変えたのか? 現代社会研究科論集: 京都女子大学大学院現代

- 社会研究科紀要, **13**, 123-136.
- 増井啓太・田村紋女・マーチ, エヴィータ (2019). 日本語版ネット荒らし尺度の作成. 心理学研究, **89**, 602-610.
- 松島公望・石川亮太郎・林 明明・橋本和幸・毛利伊吹・中村裕子・石垣琢磨・宮下一博 (2017). 大学生版スマートフォン依存傾向尺度作成の試み. 千葉大学教育学部研究紀要, **66**, 283-291.
- 松浦彰護・坂東美知代・佐藤美央・中谷章子 (2020). 看護大学生の SNS 利用における対人コミュニケーションの特徴. 神奈川工科大学研究報告 A 人文社会科学編, **44**, 9-15.
- 宮城妃菜・網内詩帆・萩 彩乃・高木ルリ子・花田裕子・永江誠治 (2020). 看護大学生におけるインターネット依存傾向とインターネット利用状況との関連. 保健学研究, **33**, 35-45.
- 宮戸悠貴・小玉正博 (2017). 中学生におけるインターネット依存と学校適応, 精神的健康との関連. 埼玉学園大学心理臨床研究, **3**, 10-21.
- 森 丈弓・名取洋典 (2018). 大学生向け能動的・受動的 SNS 疲れ尺度の作成. 心理臨床学研究, **36**, 409-418.
- 森 丈弓・名取洋典・小崎茉貴 (2014). SNS 疲れを測る (1) 受動的 SNS ストレスイベント尺度の作成. 日本心理学会第 78 回大会発表論文集, 61.
- 諸井克英・木ノ下晴菜 (2021). 女子大学生における居場所感覚の基底にある心理学的機制的探索 (VI): 日常の心理学的安寧感と SNS (social networking service) 世界における居場所感覚. 同志社女子大学生生活科学, **54**, 1-10.
- 二宮有輝 (2017). 大学生の精神的健康が SNS 依存傾向に与える影響について—SNS 上の自己呈示を媒介変数としたパス解析による検討—. 学校メンタルヘルス, **20**, 37-47.
- 西村洋一 (2017). LINE のプライバシー設定と利用行動の現状と関連する要因の検討. 日本教育工学会論文誌, **40**, 367-377.
- 西村洋一・遠藤健治 (2009). 高校生のインターネット利用状況についての基礎的検討—対人不安傾向, 性別を要因とした分析. 北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要, **2**, 41-53.
- 能仁結衣・村上勝典・宇都宮真輝 (2022). SNS 利用行動尺度作成の試み. 岡山心理学会第 69 回大会発表論文集, 27-28.
- 小倉正義・藤本優紀 (2019). LINE 利用に関する不合理な信念尺度の作成の試み—大学生・大学院生を対象に—. 日本教育心理学会第 61 回総会発表論文集, 325.
- 大野志郎 (2019). SNS 依存および諸問題と利用動機との関係—逃避, 優越感, 共感によるリスクの比較. 情報教育ジャーナル, **2**, 10-17.
- 岡本卓也 (2017). SNS ストレス尺度の作成と SNS 利用動機の違いによる SNS ストレス. 信州大学人文科学論集, **4**, 113-131.
- 岡安孝弘 (2016). 高校生のインターネット利用行動とインターネット依存, 精神的健康の関係. 明治大学心理社会学研究, **12**, 17-30.
- 澤井智哉・福岡欣治 (2018). 大学生のインターネット利用動機とインターネット依存傾向の関係. 川崎医療福祉学会誌, **28**, 77-87.
- 申 知元・潮村公弘 (2019). SNS 利用態度と友人観の因果関係: SNS サービスの特徴の相違に着目した検討. 多文化・共生コミュニケーション論叢, **14**, 5-16.
- 高橋尚也・伊藤綾花 (2016). SNS 利用における青年の対人関係特性: Twitter と LINE 利用時の行動に注目した検討. 立正大学心理学研究所紀要, **14**, 39-50.
- 田ノ上実沙・田邊敏明 (2020). インターネット依存傾向における使用目的と日常生活スキルとの関連性. 山口大学教育学部研究論叢, **69**, 21-28.
- 戸田雅裕・西尾信宏・竹下達也 (2015). 新しいスマートフォン依存尺度の開発. 日本衛生学雑誌, **70**, 259-263.
- 鶴田利郎・山本裕子・野嶋栄一郎 (2014). 高校生向けインターネット依存傾向測定尺度の開発. 日本教育工学会論文誌, **37**, 491-504.
- 都筑学・宮崎伸一・村井剛・早川みどり・飯村周

平 (2019). 大学生における SNS 利用とその心理に関する研究—LINE, Twitter, Instagram, Facebook の比較を通じて—. 中央大学保健体育研究所紀要, **37**, 7–33.

Young, K. S. (1998). *Caught in the Net: How to recognize the signs of Internet addiction and a winning strategy for recovery*. New York: John Wiley.